

西大寺蔵十二天画像について

京都市立芸術大学大学院美術研究科博士課程

長谷川容子

西大寺に伝来する十二天像（以下、西大寺本とする）は、我が国最古の十二天画像とされるが、その制作時期については九世紀頃とされるにとどまり、確実な史料や手がかりがないためその制作背景も明らかでない。これまでの諸先学の研究の中で西大寺本の制作時期について言及するものとして、柳澤孝氏による空海が自ら始修した御七日御修法のためにこの画像を制作したとする見解と、濱田隆氏を中心とする宗叡の時代に真言院所用として制作されたとする見解が注目される。濱田氏は主に図像的特質の分析から西大寺本が九世紀後半に制作されたものであるとし、さらに完備された十二天関係経軌を請来し、十二天修法の完成者として重要な役割を担ったとされる宗叡が真言院に請用したものであるとされている。空海は十二天の成立への最初の段階といえる『金剛頂瑜伽護摩儀軌』や西大寺本と図像が近似している『十天形像』を請来しており、一方宗叡はさらに完備された十二天関係経軌を請来し、十二天修法の完成者として重要な役割を担ったとされる。発表者も西大寺本は真言院所用の十二天像であったと考えるが、空海・宗叡とも御修法を勤仕したことが伝えられており、いずれも西大寺本の制作に関与した可能性がある。そこで、本発表ではこれまで細部まで論及がなされていない西大寺本の様式的位置づけを見直し、その上で西大寺本の制作時期及び背景を再検討したい。

表現上の特色について、最も注目したのは十二天及び各侍者の顔貌表現である。西大寺本の多くの尊像に、横に大きく張った下顎と豊かな頬を特徴とする表現が見られる。近似した表現は東寺御影堂不動明王坐像天蓋の八供養菩薩像にも見られ、その他にも共通点は多い。この近似性は西大寺本と八供養菩薩像が同時代に制作されていることを示していると考えられる。九世紀の仏教絵画のうち制作年代が明らかなものとして、弘仁十二年（八二一）に制作された東寺の竜猛・竜智像が残るが、広い頬と顎、量感のある肩など顔貌や体軀の表現において西大寺本と共通している点はあるものの、西大寺本に竜猛・竜智像の様式的なつながりを見出すことはできない。また、神護寺高雄曼荼羅に描かれた諸尊は適度な量感のある均整のとれた体軀を示しており、西大寺本とは大きく異なる様式を示す。空海が制作に関与したとされる九世紀前半のこれらの作例と西大寺本の間には様式的差異が見られ、西大寺本の制作時期は空海から時代を経るものと考えられる。八供養菩薩像と西大寺本とは同時期の制作であると思われ、その制作時期は御影堂不動明王坐像が制作されたとされている九世紀中頃から後半（持物資料を重視すれば貞観九年（八六七）頃）であろう。結論として西大寺本は、宗叡が真言院所用として両界曼荼羅を施入した貞観十一年（八六九）と近い時期に、同じ宗叡が中心となって制作されたと考えられる。